

初めて行った合コンに  
なぜか過保護なお兄ちゃんも  
参加していて

# お仕置き クリ責め

とらぶらぶ溺愛エッチで  
快樂漬けにされる話



「……ごうこん？」

「そう！ OBの皆さんやそのお友達の人とね、居酒屋で飲み会するの。先輩たちと仲良くなれるしさ、雛乃ちゃんも来るよね？」

練習終わり、テニスサークルの先輩がニコニコと笑顔で話しかけてきた。

どうやら近々大学のOBの方々と、合コン？ があるらしい。

「うーん、でもわたし、あんまり遅くは……」時までに家に帰らなくちゃいけないくて」

「えっ、まだ門限あるの！？ 雛乃ちゃんもお酒飲めるようになったしさ、もう大人じゃん？ 少しくらいはいいんじゃない？」

「そう、ですかね……？」

(でも……心配すると思うんだよなあ、お兄ちゃん……)

「どうしてももう一人必要でね？ 合コン行ったらもーっと大人になれるかもしれないよ……!？」 だから、ね、ね、お願い〜!」

なんで一人必要なんだろう……と思いつきながらどうしようか考えていると、ほとんど無理やりメッセージで場所と時間を送られてしまった。

心配するお兄ちゃんの顔が浮かぶけれど——言われてみたら私ももう大学生で、数年後には社会人だ。

いつまでも子供のままでお兄ちゃんに甘えてばかりじゃよくないかな、なんて思う。

相談してもしダメだったら、そのとき断ればいいかな……と、渋々ながら頷いた。

——初めて行った合コンになぜか過保護なお兄ちゃんも参加してお仕置きくり責めたらぶらぶら溺愛えっちで快樂漬けにされる話——

「それでね？ わたしももう大人だし、行ってみようかなあって」

「……ふうん？ 合コンに………ねえ」

いつも通り、ソファで後ろから抱き締められながらゲームをしている最中。今日のことを思い出してお兄ちゃんに聞いてみる。

お兄ちゃんは訝しむように目を細めて私の頬を撫でた。

お兄ちゃんは——お兄ちゃん、といっても本当のお兄ちゃんではない。本名は日向 真斗（ひゅうが まなと）という、わたしの家のお隣のお兄さんだ。

小さい頃から親が遅くまで帰ってこないわたしの面倒を見てくれていた、四つ上の優しいお兄ちゃん。

今はフリーランスでお仕事をしていて、わたしの家の書斎部屋を借りるようになったから、本当に家族みたいな人だ。

「なんか、親睦会みたいな感じなんだって」

「ひな、合コンで何するかとかは聞いた？」

「わかんないけど、先輩たちと仲良くなれるんじゃないかなあ？ あ、あとね、もっと大人になれるかもしれないんだって！」

「……大人……ね。ひなは、どういうことすると大人になったって思うの？」

「えー、うーん……やっぱりお酒かなあ……カクテルの違いがわかるようになる……とか？」

数秒の沈黙のあとにそっか、と優しく頭を撫でられる。

いつもわたしが出掛けたり、遅くなりそうだとすごく心配するけど……今日はあんまり心配してないみたい……？

「……あんなにちっちゃくて、ずうっと僕の後ろついてまわってたひなが大人、か……あんまりピンと来ないなあ」

「それは小学生のときとかの話でしょ？ わたしもう大学生だよ、お兄ちゃんにばかり甘えちゃよくないかなあって思ったの」

「ふうん……じゃあ僕ももう、ひなのこと可愛がらなくていいんだ？」

「それは……やだ、けど……」

思わず口籠ると、ふふっ、と笑って抱き締めた身体をゆらゆらと揺らされる。

この時間がなくなっちゃっちゃうのは嫌かも…と思っていると、頭のとっぺんに顎をとすんと乗せられた。

「しょうがないなあ…：わかった、行ってらっしゃい。でも遅くなると危ないから、早めに帰ろうね？ お酒は一杯までで、勧められても飲んじやダメ。周りの男の人に触ったり触られたりもダメだし、帰り送るよって言われても断ること」

「えへへ、はあーい！」

親睦会でそんなことあるのかな？ と思いつつ、いつもの心配性っぷりが出てどこか安心する。

わたしは素直に頷き、そのままお兄ちゃんに寄りかかってゲームを再開した。



部屋にあがる。

掘りごたつ形式で座りやすそうだなあ、なんて呑気に考えていると、歓迎の声があがった。

「あ、来た！ 雛乃ちゃんっていうの？　かわい〜、よろしくね〜！」

「俺の向かいおいで〜♡」

噓し立てられてびっくりする。先輩がダメダメ、この子こういうの初めてなんですよ〜！  
なんてフォローしてくれるけど雰囲気についていけず固まってしまった。  
すると。

「——僕の向かい、空いてるから。どうぞ？」

知った声でした。

先輩が皆に聞こえないように、ほら見て、イケメンじゃない！？　と囁く。その声の先  
に居たのは、どうみても——

真斗お兄ちゃん、だった。

「なっ、え……………!?!」

「あはは、びっくりしすぎ! ほらほら、呼んでるから座っちゃいなよ」

「ええ……………?! あっ…あ、……………は、はい!」

お兄ちゃんは私にだけ見えるようにして、口元に人差し指を当てている。内緒、ってことだろうか。

どうして……………。

訳が分からない気持ちを抱えながら、先輩に押されるままお兄ちゃんの前の席に座る。

「雛乃ちゃん……………って言うんだ? 可愛い名前。よろしくね」

「ええと…いえ、そんな……………」

雛乃ちゃん、なんて、覚えている限り五年は呼ばれていない。こわごとと調子を合わせ

ると、突然顔を近付けられた。

色素の薄い瞳が悪戯っぽくこちらを見ている。

まつ毛はきつとわたしより長い。すらっとした鼻筋と、まるで人形のように整った輪郭を見て、思い出した。

毎日一緒にいるから忘れていた。お兄ちゃんはどこに行っても誰と会ってもイケメンだね、と言われる人なんだった。

「……ひなのこと心配だから、友達参加ってことで来ちゃった。僕らのことは内緒、ね？」

わたしにだけ聞こえる声量でそう言うとは顔と顔を離される。あんまり心配していないのかと思ったけど、そうじゃなかったんだ……。

ちょっとだけ嬉しいような、まだ兄離れできないような複雑な気持ちを覚えつつ周りを見回していると、咎めるような視線を送られる。

「せっかく向かいに来たんだから僕とお喋りしよう？ 雛乃ちゃん。ああ……自己紹介がま

「だだったっけ。僕はね、日向 真斗です」

「あ、は、はい……！ えっと……ま、真斗さん」

真斗さん、なんて生まれて一度も呼んだことがない。どうにも感じる違和感にもぞもぞとしていると、明らかにこの状況を楽しんでいるお兄ちゃんが首を傾けて笑う。

「初めてなんだっけ？ ふふ、緊張してて可愛いね。お酒はあんまり慣れてない？」

「そんな……あ、はい……！ 数回しか飲んだこと、なくて」

慣れてない？ も何も……お兄ちゃんが、飲む時は少しだけ、弱いお酒だけにしておこうねって言うから、ジュースみたいな味のカクテルドリンクを数回飲んだことしかないのだ。そう言いたい気持ちは山々なのに、話している様子を他の人にちらちらと見られるので必死に他人のふりをするしかない。

(どうして、こんなこと……)

戸惑っているうちに全員が集まったようだった。女の子がわたし側、男の人が反対側に座る。

もしかして男女の人数が揃わないといけないのかな？　と思いつつ、飲み物の注文をする流れになったので、前に飲んだことのあるカシスオレンジを頼んだ。

アルコールがあんまり強くなかった気がするし、ジュースみたいで美味しかったから、これくらいならそんなに酔わないはず——だと思っただけけれど。

「……それで、その瞬間わたしの頭のとっぺんに、テニスボールがぼーんって当たって……！」  
「ふふ……ははっ、見たかったなあ、それ」

——カシスオレンジを飲み干す頃、わたしはすっかり饒舌に喋るようになっていた。

話している間に席替えがあつて、お兄ちゃんはほとんどの女の子から隣に来て欲しいとアピールされていた。

けれどお兄ちゃんが「ごめんね、僕は雛乃ちゃんの隣がいいから」と言つて、わたしの肩を抱いてそのまま一番奥の席に移動してしまつたので、結局わたしは他の男の人とは誰と

も喋れていない。

想像していた合コンとは全然違うけれど、楽しいからいっか、なんて思っていた矢先。お兄ちゃんが、空になったわたしのグラスを見て言った。

「お酒美味しかった？ 足りないなら……もう一杯頼む？」

——あれ？ お兄ちゃん、一杯だけだって言ってなかったっけ……。

きょとんとしている私を気にすることなく、優しい笑顔でドリンクメニューを広げている。

お兄ちゃんが言うならいいのかなあ……と違って一緒にメニューを覗き込んだ。

「酔った雛乃ちゃん可愛いから、もっと見たいな。オレンジジュースのやつは飲みやすいと思うけど……これとか、どう？」

勧められたお酒は、カシスオレンジと同じオレンジジュースの入った、スクリュードラ

イバーというカクテルだった。

「——はい、少し休んでもらって、起きたら送っていいこうかと」

お兄ちゃんの声が遠くに聞こえる。

スクリュードライバーを半分ほど飲み切る頃、わたしは肩をお兄ちゃんに預けてうとうととしていた。お兄ちゃんの手がわたしをの支えるように腰に回されて……太ももまで這わされている。

眠たい中、スカートの上からゆるゆると撫でられるのがくすぐったくて身を振ると、余計にしっかりと腰を抱かれてしまった。

「……ん……わたし、まなとさんと、帰るんですか……？」

「そうだよ。でも雛乃ちゃん、今歩くと危なそうだから、もう少し休んでからにしようか」  
わかりました……と頷いて、ちびちびとお水を飲む。

お兄ちゃんの肩に寄りかかって、少しこうしていれば冷めるだろう……と思っていると。  
しゆる、と衣擦れの音が響いて――机の下、太ももまで、スカートをたくし上げられてしまった。

「んえ……？ おに……んんっ、真斗さん、なに……？」

驚いてお兄ちゃんを見ると、変わらず優しい笑顔でこちらを見ている。

「暑いでしょ？ ちょっと身体冷ましたほうがいいから、こうしておこうね」

「ええ……？ やだあ、恥ずかし、……っ……」

お兄ちゃんの長くて綺麗な指が太ももに直接触れる。

小さい頃、じゃれあって擦り合っことしたのはあったけど……今は、なんだか触り方

が違う気がして……変な気持ちになる。

擦ったいようなぞくぞくするような感覚を堪えていると、耳元に唇を寄せて、周りに聞こえないように囁かれる。

「——足開いて」

「……え、……っ!？」

いつもの優しいお兄ちゃんじゃ、ない。

大人の男の人の、掠れてどこか艶めいた声が鼓膜を揺らして——ぞくりと腰が震える。戸惑って顔を見るけど……変わらずに、どこか悪戯っぽく笑いかけているだけで。

その笑顔のまま、すり、すり、と誘うように閉じた足の隙間を撫でられる。

(……なんで……わたし、こんな、あつくて……ドキドキ、して……)

ぞくりと唾を飲み込む。

くっつけていた膝小僧をそっと外して、ほんの少しだけ……隙間を空けた。

お兄ちゃんは、驚いたように瞬きをしている。

開けて、言われたから開いたのに——そう思って唇を噛み締めた矢先、指先がすり……

♡ と足の付け根の、中心を撫でた。

「……………っ、ん……………！」

びく、と腰が揺れる。みんなの前なのに変な声が出そうで、お兄ちゃんの肩に隠れるように縮こまった。

すり…すり…♡ と、確かめるように何度か、下着の上から割れ目をなぞられて呼吸が浅くなる。

そんなところ、恥ずかしいしやめてほしい、のに。

カリッ…♡

なぞる指先が突起を引っ搔いて止まった。

びくっ♡♡ と、また大きく腰が揺れてしまって、見つかってしまったのを悟る。

縦るようにお兄ちゃんを見ると——興奮した、熱っぽい瞳でこちらを見るお兄ちゃんがそこにいて。

「……声、出しちゃダメだよ」

すりすり……♡

カリ♡ カリカリカリカリ♡♡

自分でしか触ったことのなかったクリトリスを見つけられて、何度も引っかかれる。

「ん……♡♡♡ う、……、っ♡♡♡」

（どうしょ……きもち、いい……♡ 声抑えるのむずかしい♡ こんな…絶対だめなのに、お兄ちゃんなのに……いっぱい人が、いるのに……なんで、こんな興奮してるの……っ？）

みんな楽しく話している机の下、自分だけがはしたなく腰をカクつかせている。

そう思うほどにじわあ……♡ と、おまんこの奥から蜜が溢れてきて、足が開いていっ

てしまう。

「……雛乃ちゃんって、こんなにえっちな子だったんだ？」

「ちが、真斗さんが……開けて、うから……っ♡ う……っ♡」

「僕、開いてって言っただけだよ？ 自分から腰浮かせて、触って触って♡ っしててるの誰？ もうここ、パンツの上からでもわかるようになってる……っ♡」

「ちが、うのにい……っ♡ !♡ ♡ ……う……んう……っ♡♡」

カリカリカリ♡

こすこすこす♡♡

わたしにだけ聞こえるよう、耳元に顔を近づけて恥ずかしい言葉を吹き込まれる。否定しようとして声を上げた途端、カリカリされる指を激しくされて声が出そうになった。

(ひどい……♡ こんな、いじわるなお兄ちゃん、知らない……っあ、あ♡ パンツ、ぎゅっっ  
て引っ張られちゃってる♡ おまんこに食いこんじゃうの、ダメえ……♡)

必死に声を堪えている姿を樂しげに見つめられてわけがわからなくなる。

もう無理って言うみたいにするふると首を振って腕にしがみつくのと、ふっと微笑まれて手を離された。

やっと終わったような……ほんの少しだけ物足りないような気持ちを抱えていると、お兄ちゃんは私を支えるように立たせて、みんなに挨拶を شدした。

「あ……かつ、帰るんですか……？」

「うん、雛乃ちゃんまだふらふらでしょう？ 送っていくよ」

「あっ、えと、ありがとう、ございます……っ」

何人かの恨めしげな視線を背中に感じつつ、居酒屋から出る。

恋人みたいに手を繋がれて、家に帰るのかと思ったら……繁華街の雑踏を離れた裏路地の、小さなカラオケボックスに連れていかれてしまった。

「ひな」

部屋に入るまでずっとなにも喋らなかつたお兄ちゃんが、いつもみたいな調子で名前を呼んでくれた。ようやく演技しなくてもいいことに少しだけ安心していたら、おでこがぶつかるほどの近さで顔を覗き込まれる。

とびっきりの笑顔と甘い声で、お兄ちゃんはこう言った。

「お仕置きだよ」

——ぢゆる………♡

ぬりゅぬりゅ♡ れろれろれろ………♡♡

「は………っふう、う〜…♡ んんっ♡♡ やあ、おにい、ちや………も、ゆる、してえ…っ  
あ、あっ♡♡」

「ダメだよ、僕の言ったこと全部破ったのは誰だっけ？ お酒も、勧められても飲んじゃダメ、って言ったよね？」

狭いカラオケボックス。お兄ちゃんは、座って足を広げたわたしの前に跪くようにしている。

スカートはたくし上げられ、パンツは脱がされてしまった。露出したおまんこにお兄ちゃんの舌が這わされていて、とても恥ずかしくて直視できない。

「ごめ…あぁ♡ んん…：…っ、ごめ、ん、なさ…あ、あっ♡ だめ、くり、なめるのやだあっ♡♡」

「ひな、勧められたのがどんなお酒だったかもちゃんと見てなかったでしょ？ あれはね、オレンジジュースのお酒だけど、カシオレより度数がすごく高いんだよ。まだ冷めてないのかな…：…ここ、ピンピンに尖ったクリトリス、溶けそうなくらい熱くなっちゃってるね」

ちゅこちゅこちゅこ♡

くりゆくりゆくり♡♡

敏感なクリトリスを指先で摘んでこねられて、腰がびくびくと跳ねる。

さつきみたいに様子を伺うような触れ方じゃなくて、ほとんど無理やり気持ちよくさせられるみたいな激しさで責め立てられていて頭に火花が飛び散っていく。

(あ♡ クリつままれてシコシコされてる♡ こんなの自分でしたことないっ♡ シコシコだめ♡♡きもちよすぎて何もかんがえられない♡ ちゃんと反省しなきゃだめ、なのに……っ  
うう、むりだよぉ……♡♡)

「それにあーんな簡単に触られちゃって……ちっとも嫌がってなかったよね。はあ、本当、心配してついてきて良かったなあ……大切なひなが、他の男に触られなくて本当によかった。すぐ足開いて、痴漢みたいなことされてヨがっちゃって……ひながこんなに、おまんこよわよわな子だなんて知らなかったな……」

ちゅ♡ ぢゅう♡

っんっん♡ れろれろ♡♡ ぢゆるるるるっ……♡♡

「ちが、あ♡ あっ♡ すうの、だめっ♡ つひ、うう……ちがう、のにい……っ♡」

「何が違うの？ 今もちよつと触っただけでこんなに腰びくびくさせて、おまんこからとろとろえっちなお汁出しちゃってるのに。お仕置きなのに喜んでメス媚びして……こんなにえっちな子、すぐお持ち帰りされてちんぽハメられちゃうよ？」

「んあ、あっ♡ やだ、ちゃんと、っんん♡ ことわるもんっ♡」

「ほんとに断れる？ こんなに濡れてたら、やめてって言ってもやめてもらえないよ？ このぬるぬるのおまんこオナホみたいにならずこ出し入れされて、使われちゃうんだよ……？」

「や、やあ……っ、やだあ、も、しないから♡ おにい、ちゃ……ゆるし……っあっ♡ ううっ、ぴんぴんするの、だめええ……っ♡♡」

囁かれる言葉にすらびくびくと身体が反応してしまう。ゆるして、と言おうとしたのにダメって言うみたい先端を指先でぴんぴんっ♡ とはじかれて腰がヘコつく。

「もうしない？ じゃあ、ちゃんとごめんなさいできる？」

「ん♡ んう……っ♡ する、ごめんなさい、するからあ……♡♡」

「じゃあ、ほら、おまんこ自分で広げて？」

「ふえ……っ?」

手をそっと掴まれてぐちよぐちよのおまんこに導かれる。さっきからずっと、責め立てられるみたいなことばかり言われているはずなのに、口ぶりだけは甘やかすように優しく……頭がおかしくなりそうだ。

「ほら、お兄ちゃんによく見せて? 指でくばあ……っ♡って開いて、これがお酒飲まされて、人前で触られて気持ちよくなっちゃった恥ずかしいおまんこです、ごめんなさいって言おうね」

「——……っ、そ……んな、い、いえ、ないい……っ」

「許して欲しいんですよ? 大丈夫、ちゃんと見ててあげるから。ふふ……上手に見せられていい子いい子……♡」

くちくち♡ ちゅ、れろおお……っ♡

促されるままおまんこの入口をくば……っ♡ と広げると、クリトリスを褒めるみたい撫でてからキスをされて、裏筋を下から舐め上げられる。

(あっ♡ だめ、きもち、い……♡ 恥ずかしいのに……お兄ちゃんに恥ずかしいことされて、きもちよくなっちゃってるなんて、絶対ダメなのに♡♡ 腰へこへこさせておまんこお兄ちゃんの顔に近付けて、もっと触って♡ ってしちゃうよお……♡)

「ほら、ひな？ 言ってごらん……？」

「うう……っ、こ、これが……おさけ、のまされて……、ひとまえ、で……っ」

「気持ちよくなっちゃった恥ずかしいおまんこ、ね？」

「……っ♡ き、きもち、よくなっちゃった……っ♡ お、おまんこ……っあぁ！ だめえ、おにい、ちゃっ♡♡ さわるの、やぁあっ♡♡」

「恥ずかしいおまんこ、でしょ？ ちゃんと伝えるように頑張って？」

ぬりゅぬりゅぬりゅ♡

ちゅこちゅこちゅこっ♡♡

上手に言えなくて思い切りクリトリスを扱かれてしまう♡

「いう、いづからあ♡ はっ、はずかしい、おまんこ、です……っあ♡ あっ、だめ、ゆび♡ ゆびとめてえ……っ♡♡」

「ごめんなさいまで言えたら止めてあげる。ほら、ちゃんと開いて」

力が抜けてしまった指を指摘されて慌ててもう一度おまんこをくぱり♡ と開く。愛液がとぶとぶ垂れてお尻の穴まで伝ってしまっって恥ずかしい。

「ううっ♡ おに、おにいちゃ……はずかし、おまんこで……ごめ、んあっ♡ ごめん、なさいい……っあ!?!♡♡ だめ、おにい、ちゃ……っそれだめ、イっぢやううっ♡♡」

ちゅこちゅこちゅこちゅこっ♡♡

必死に言葉を吐き出した途端、激しく責め立てられてほとんど無理やり絶頂まで押し上げられる。びくびくびくっ♡♡ と身体が大きく揺れて何度も腰がカクついて、気持ちいいしか考えられなくなる。

——……わたし、恥ずかしいこと言わされて……イっちゃ、った……♡♡

荒い息を落ち着けようとふうふうと何度も肩を揺らしていると……何も言わなかったお兄ちゃんが私の前から立ち上がり、隣に座った。

もう終わった……？ とホッとした瞬間、腰を抱えられて。

「あ、え……っ！？ な、に……！！？」

お兄ちゃんの胸に背中をつけるような形で、膝の上に座らされてしまった。

「可愛くごめんなさい言えて偉かったけど……ひな、ごめんなさいしながらイっちゃったよね。お仕置きなのにイっちゃったら駄目でしょ？ だから……もう一回頑張ろっか」

ぱちんっ、と音がしていても簡単にブラジャーのホックを外されてしまう。お兄ちゃんが肌見せちゃダメだよって言うから一番上までボタンを止めていたシャツだったのに、簡単に外されて、ぷるん♡とおっぱいを丸出しにされてしまった。

膝の上に跨っているからイったばかりのおまんこも丸見えで——もし、誰かドアの前を

通ったら。

「っ!?! やっ、やだあ、お兄ちゃ……これ、見られ、ちゃ……っ!」

ドアの真正面にいるわけではないし、ドアに貼ってあるポスターで隠れてはいるけれど、角度を変えて何度か覗かれれば何をしているのかわかってしまう。

ばくばくと鳴る心臓を確かめるようにお兄ちゃんの手が胸へと這わされて、可愛がるみたいの下乳を搾る。

「ひな、さっきから恥ずかしいことされて興奮してばっかりだね——これじゃ反省にならない? もっとすごいこと、しようか?」

すりすり、くるくる……♡

きゅ…っ♡

乳輪を焦らすようになぞられた後、柔らかく摘ままれて身体が丸まる。

「ひい……っ♡♡♡ だめ、あっ♡♡♡ おっぱい、つまむのダメえ……っ♡♡♡ んん、ちゃんと、反省するからあ……っ♡♡♡」

「本当かなあ……ひなのおっぱい、つままれて嬉しそうにしてるよ？ ほら、僕の手嬉しい嬉しいって膨らんできて……あーあ、またえっちなお汁溢れてきちゃってる」

おっぱいのさきっぱをカリカリ♡♡♡ カリカリ♡♡♡ と、細い爪で引っかかれながら、もう片手で確かめるようにおまんこを撫でられる。

(やだ♡♡♡ ほんとは期待しておまんこ濡らしてるのすぐバレちゃう……♡♡♡ 乳首とおまんこ一緒にすりすりされると気持ち良くて……あ、あ……っ？ だめ、あっ、指……入れ、られて……っ♡♡♡)

溢れた愛液を纏ってぬるぬるになった指が、ずぶぶぶ……っ♡♡♡ とおまんこの中に入っていつてしまった。期待にひくひくと震えるナカの動きが全部バレてしまう。

「さきっぱカリカリする度にナカ締め付けちゃって……やっぱり反省してない？ もっと

大きい音出して、誰かに見て貰おうか？」

ずぶずぶずぶっ♡ こちゅこちゅこちゅ

じゅぶじゅぶじゅぶじゅぶっ♡♡

内壁の、気持ちいいところをこそぐみたいにかき回されてひどい音を立てられる。恥ずかしいし、反省してるはずなのに、そんなのどうでもいいくらい気持ち良くて何も考えられなくなっていく。

「ひいっ……♡ う、ううっ♡♡ だめえ、お兄ちゃ……これ、きもちよすぎ、てえ♡ からだ、おかひ……っあ、あっ♡ はんせ、はんせいしてる、からあ♡ やめ、てええ……っ♡♡」

「本当？ 知らない人に恥ずかしいとこ見せなくても反省できる？ もう合コン、行かないって約束する？」

こちゅこちゅこちゅ♡

じゅぶぶぶぶぶつ、とんとんとんっ♡♡

激しい動きにほとんど泣き叫びながらこくこく頷く。奥を何度もノックされて、乳首をカリカリ♡ する手も止めてもらえなくて。

ついさっきイったはずなのに、視界がちかちかと瞬いて絶頂感が押し寄せる。

「ううっ、する、はんせい、しますっ♡♡ だから、ああっ♡♡ もお……きもちいいの、やめ、てえ……っ♡♡」

ぐぢゅぐぢゅぐぢゅっ♡

どちゅどちゅどちゅっ♡♡

「合コン、もう行かないって、約束する?」

「あっ、ぐっっ♡ やくそく、する、しますっ♡♡ も、あっ♡ ごうこん、行きませんっ、……あっ、も、っっあ……っ♡♡」

びくびくびく……っ♡♡

止めてもらえなかった手に敵わず、何度も身体が震えて盛大にイッてしまった♡

「……はっ、ふ……っごめ、お兄ちゃ……わたひ、また、イっちゃ、った……っ」

「……ふふ、いいよ、ちゃんと約束できたから今度は許してあげる。はあ、ひな、可愛い……」

イったあとにも長くビクつく身体を甘やかすように抱きしめられて力が抜ける。

今度こそ……いつも通りの優しくしてわたしに甘いお兄ちゃんに戻ったみたいだ。

大切なものを触るみたいに髪の毛を撫でられてホッとする。

「ごめんね……僕、ひなが心配で心配で、可愛くて……ひどいことしちゃったね。でも、どうしても分かって欲しくて……」

「……お兄ちゃん……、」

「危ない奴に狙われたら、もっとすごいことされちゃうから……だから、ね？ 絶対もう、僕以外の男がいる場で飲んだりしたらダメだよ」

「ん……、うん……わかった、飲まないって約束するよ。……でもね、」  
「……でも？」

ごくりと唾を飲み込む。

あんなイキ方をしたはずなのに——わたしの身体は、まだ熱を持っている。まだお兄ちゃんに触れられたことを、喜んだままでいる。

だからこれだけは、誤解されたままでいるわけにはいかない。

「わたし……お兄ちゃんだから、足……開いたんだよ……？」

他の人だったら、ちゃんと……断ってるよ。

そう呟いてお兄ちゃんのほうへと向き直る。と——お兄ちゃんの綺麗な切れ長の瞳が、大きく開いて……そうして、ゆっくりと瞬きをしたのが見えた。

その視線が、小さい頃みたいな、優しく妹を見守る視線じゃないことに気づいて。わたしには、それがなぜだか、嬉しかった。

